HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宇都宮芳明氏の遺してくれたもの : 最後の二著を中心に
Author(s)	田村, 一郎
Citation	哲学, 45, 57-70
Issue Date	2009-03-21
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39633
Type	bulletin (article)
Note	特別寄稿 (Special Contribution)
File Information	APS_004.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

《特別寄稿》

宇都宮芳明氏の遺してくれたもの――最後の二著を中心に――

田村　一郎

一　はじめに

私たちの大切な友人であり師であり、優れた哲学者・倫理学者であった宇都宮芳明氏が亡くなってまもなく1年半になる。昨年7月13日に「北海道大学哲学会研究発表会」が開かれたが、その最後に追悼の意味を込めて表記の題で講演させていただいた。以下は、それを軸にまとめ直したものである。

僭越をかえりみず私がこうしたテーマでお話しさせていただいたのは、ともにカントを中心に研究を続けてきたからばかりでなく、私との話し合いも、氏が『純粋理性批判』と取り組む一つの契機になったように思えるからである。

宇都宮氏は50才代の後半からカントの主著の「訳注」を進められ、5年ほどの間に『道徳形而上学の基礎づけ』（１９８９―以下カントの書名は宇都宮氏の訳に従った）を手始めに、『実践理性批判』（１９９０）、『判断力批判』（１９９４）を相次いで刊行された。大学での演習などで役立てることをめざしてだろう、氏なりの深い読みをふまえた精確な翻訳に加え、節ごとに簡潔で行き届いた注釈をほどこし学習・考察の手引きとしておられる。

ちょうどこの仕事を終えられた頃、久しぶりでお会いした。ことに『判断力批判』のご苦労などを話されたのちに、

「これでやっとカントの仕事も一区切りついた」と、ため息をつかれた。驚いて私は尋ねた、「えっ、『第一批判』がまだでしょう」。氏はすまして、『第一批判』はいくつものよい訳や注があるからやる気がないという。それでは未完のままになると議論になったが、最後に「君が手伝ってくれるならやってもいい」ということになった。大変なことは思ったが、行きがかり上引き受けざるをえなくなった。

『純粋理性批判』の「訳注」（２００４―72才春）が出たのは『判断力批判』のちょうど10年後だが、実質のブランクは5年ほどで、１９９９年夏に以文社との相談がまとまり4年半ほどで完成している。病と診断されたのは２００５年6月だそうだが、すでにそれ以前から体調を崩しておられたようで、われわれの草稿の手直しにもかなりご苦労なさったようである。詰めに当たっては相当の厳しいやりとりも覚悟していたが、訳についても注についてもそのわりにクレームは少なかった。今思うと病のきつさが、そうさせたのかもしれない。

二　氏の遺してくれたもの

初めに私なりに、氏が遺してくれたものを次のようにまとめてみた。

1）　昨年5月から、『岩波講座　哲学　全15巻』が出されている。そのＰＲを兼ねて『図書　２００８年5月号』で、「哲学はいま―『岩波講座　哲学』の刊行によせて」という「座談会」が開かれた。そこで編者の一人野家（のえ）啓一氏はリオタールの言葉を引きながら、現在は「大きな物語」つまり「大文字の哲学」「体系構築型の哲学」はすでに終焉したと言われ、哲学の内部でも細かな議論が先行しグランドセオリーが語りにくくなっていると嘆いておられる。これに対して脳医学者の茂木健一郎氏は、今こそ経験科学を越えたところからものごとを見直す「思想の勇気」が必要なのではと、哲学への期待を述べられている。宇都宮氏はまさにこうした流れに立ち向かい、カント哲学を軸

に「大文字の哲学」の復権に向けて、「思想の勇気」を発揮し続けてきたのではなかろうか。

2）氏はカントの主著の「訳注」を終えた後、みずからの思索の「総論」としての『人間の哲学の再生にむけて』において、「相互主体性」の立場から「人間の哲学の再生」をめざされた。

3）さらにそれをより具体的に展開する「各論」としての『カントの啓蒙精神』において、「カント哲学＝啓蒙の哲学＝人類の道徳的資質の全的開花をめざす目的論」とみなすことで、「理論と実践の二元論」とも解釈されがちなカント哲学の一元化を試みられた。

4）徹底した「原典主義」にこだわりながら、「人類の道徳的啓蒙による人間の再生」「永遠平和」などというシリアスな現実的課題との結合を図ろうともされている。

5）何よりもいつとも知れない病の中で、われわれ同学者にこのような貴重な本を二冊も遺してくださった。

三　最後の二著での展開

『人間の哲学の再生』は、なぜ『カントの啓蒙精神』に向かわざるを得なかったのだろう。刊行は後著が２００６年10月で前著が没年の10月と前後するが、『人間の哲学の再生』は最初の「哲学の原点」（２００３）を除けば、最後のまとめとしての「相互主体性とその世界」（１９７８）を含めすべて70年代から80年代に書かれたものである。これに対して『カントの啓蒙精神』は「カントの教育論」（１９８４）や『カントと神』（１９９８）なども活かしているが、２０００年代の「啓蒙と文明」（１９９９年の日本カント協会のシンポジウム「カントと現代文明」での発表をまとめたもので、日本カント協会編『日本カント研究　創刊号』の巻頭論文）と、「カントと『人間理性の目的論』」（２００４年「京都ヘーゲル読書会」（酒井修氏主宰）での口頭発表）を柱としており、全体に新しい内容になって

いる。なお今回両著に関しては、煩瑣であり見当も付きやすいと思われるので一々の注記は省略した。

1．『人間の哲学の再生―相互主体性の哲学―』（2007年10月）

1）その基本

「人間の哲学」＝「相互主体性の哲学」とする視点を中心にしている。氏は、カントが哲学の3つの基本的問いWas kann ich wissen? Was soll ich tun? Was darf ich hoffen? のまとめとした „Was ist der Mensch?“ を柱に、それと „Was ist das Ich（oder das Selbst)?“ をどう一体化するかに腐心された。人間を「自己」と「他者」の間にある人「間」（「人―間」と表記してもよかろう）としてとらえることで、相互に他者を自己の客体でなく主体として扱う「相互主体性の立場」に到達する。これは、人間の本性は人「間」にあるとした『人間の間と倫理―倫理基準の検討と倫理理論の批判』（1980）以来の基本姿勢である。なお同書第6章で述べられているとおり、もちろん人「間」という発想は、「人間」を「人と人との間柄」「人間関係」とする和辻哲郎に由来するものだが、宇都宮氏は、和辻はこうした人間関係を「個と全」の問題に引き移し、結果的には全を個に優先させたと批判している。氏にとって人「間」「人と人との間柄」は、あくまで個と個のかかわりでなければならなかったのである。

氏は本書の「あとがき」で、きっぱりと次ぎのように述べている。「最近はもっぱらカントの哲学の解明に専心してきたが、しかし哲学という知の営みに対する私の関心が以前から『相互主体性』という問題にあることは、現在においても変わりはない」。「相互主体性」こそが、氏の思索の柱でもあり要でもあったのである。

2）その展開

Ⅰ．**哲学の原点をたずねて**―ソクラテスの場合　氏はソクラテスを、一貫して「魂への配慮」を通じて「いかに生きるべきか」を問い続けた「人間の哲学」の先駆と理解する。その精神を「哲学の原点」として、現代における

その「再生」を図ろうとする。

Ⅱ．**ハイデガー哲学の批判的な検討**　ハイデガーの「人間・価値・技術」理解を見直すことで、人「間」としての人間理解の欠如という点からハイデガーを批判している。

Ⅲ．**「人間とはなにか」という問い**　人間をその本質・人間らしさなどから吟味、相互主体性からとらえることの大事さへ導く。

Ⅳ．**自我と他我**―知覚の間主観性　知覚についての独我論的理解を批判し、私という個人の知覚がすでに間主観的構造をもつことを指摘する。

Ⅴ．**相互主体性とその世界**　フッサル、サルトル、ハイデガーを検討する中で、人間を「認識主観」としてではなく「行為主体」として捉え直すことの重要性を指摘する。カントことにブーバーを評価し、自己に対する他者を「代置不可能」な「汝」とし、その「絶対的な価値を承認」することの大事さを強調する。ハイデガーの自己を軸とする「同心円」的世界理解を自己決意中心の閉鎖的自己の世界とし、それに対してブーバーの「我―汝」を軸とし、それぞれの「応答」と「敬愛」によってのみ成り立つ世界を「楕円」とする世界・状況理解が印象深い。

（なお今回もご参加くださった岩田靖夫氏が、昨年6月に『いま哲学とはなにか』（岩波新書）を出された。この岩田氏の著書と宇都宮氏の本書は、具体的展開はともかく、哲学の原点をソクラテスに求め、いかに生きるべきかを軸に人間存在のあり方、ことに他者とのかかわりや現代的課題にこだわるという構成と発想は驚くほど似ている。お二人の、若い頃からの「哲学」を軸とした交わりの深さがうかがわれる）

2．『カントの啓蒙精神―人類の啓蒙と永遠平和にむけて』（2006年10月）

氏は「総論」としての『人間の哲学の再生』をふまえて、「各論」としての本書に挑む。長年取り組んできたカン

ト哲学こそが、みずからのめざす「人間再生のための哲学」「相互主体性の哲学」のもっとも強固な基盤たりうると信じたからである。その際着目されたのがカント思想全体を貫く原理としての「道徳的啓蒙」理解であり、それを支える「人間理性の目的論」を軸とする「目的論」的視点であり、一つの「理念」としての「永遠平和」からの考察である。以下本書ではカントの諸著作からの論証が多く錯綜しているので、『人間の哲学の再生』のように「その展開」に従うのでなく、主軸をなしているこの3点に添ってまとめてみたい。

1）「啓蒙」の三義

氏はカントの「啓蒙」をいわゆる「啓蒙論」の枠に止めず、その思索全体を貫く基本概念として見直そうとしている。それは一般的な「理性による啓蒙」に始まり、「感性の啓蒙」を経て「道徳的啓蒙」で完結する。

理性による啓蒙　カントの「啓蒙とはなにか」の、「みずからに責めのある未成年状態からの脱出」「みずからの知性（Verstand）を用いる勇気をもて」という定義はあまりに有名である。これを後にマクス・ウエーバーはより時代に即した視点から、『職業としての学問』において „Entzauberng（魔術からの解放）“ としてとらえ直したが[1]、原語のAufklärungの「理性による迷妄からの解放」をふまえた一般的な「啓蒙」解釈である。もちろんここでの「理性」が、理論と実践の両面を含むことは言うまでもない。以下本書でそれぞれの主題が中心的に論じられている箇所を（Ⅰ　**啓蒙の世紀とカント**）のように表示しておく。もちろんカントは「啓蒙」をこのように定義することによって、非自律的な生き方に安住しているドイツ人への警告としようとしたのである。

（なお「Ⅰ　**啓蒙の世紀とカント**」の副題は、「―ヘーゲルの啓蒙批判はカントに当てはまるか」である。ヘーゲルは『哲学史講義』でカント哲学を、「理論としては方法化された啓蒙（die methodisch gemachte Aufklärung）であり、つまりそこで知りうるのは何ら真なるものではなく単なる現象に過ぎない」と批判している[2]。„die methodisch gemachte Aufklärung“ が判りにくいが、Aufklärung はもちろん「ヴォルフ的啓蒙」を指す。methodisch gemachte

は「方法として整備された」とか「きちんとした」というほめ言葉とも取れるが、すぐ後で「ここでの知は主観的で有限な認識として固定されている」と決め付けていることからすると、限定付きの評価なのだろう。つまりカントはヴォルフ的啓蒙を方法的形式的に整備はしたが、ただそれだけで、しょせんは有限なものにこだわる悟性的思考の枠に止まっているという意味だろう。なお理由は判らないが、宇都宮氏はこの文章にはふれていない。それはともかく氏は、このようにカント哲学を安直にヴォルフ的「啓蒙」と同一視するヘーゲルの理解に反対し、より広い視野からカントの「啓蒙」観を見直すことで本書の地平を開こうとするのである）

感性からの啓蒙　「理性による迷妄からの解放」という「啓蒙」の一般的な解釈から、「啓蒙」は理性とのみ結び付けられ、合理化と同義のように理解されがちである。カントはそうした理性至上主義的な「啓蒙」主張の頂点のようにとらえられがちで、ヘルダーなどはそうしたカントに対抗し、より広い人間理解からの「啓蒙」の必要、ことに「感性からの啓蒙」を強調した。[3] 感性を含めカントの人間観をより総合的にとらえなおそうとする宇都宮氏は、「美と崇高の感情」や道徳律への「尊敬の感情」を重視することで、カントが「感性からの啓蒙」にも注目していたことを指摘する（Ⅴ　**感情は道徳とどうかかわるか**—道徳的感情と美と崇高の感情）。

道徳的啓蒙＝啓蒙と道徳的視点の結合（Ⅳ　**啓蒙の要となる道徳**—人間の尊厳と人間愛の条件）　氏がもっとも重視するのはこの視点で、そこにカントを「啓蒙の完成者にして克服者」とする意義を求め、「この理性のもっとも深い本質を、理論的な諸命題よりも道徳的信念のエネルギーのうちに求めることによって、啓蒙の干からびた冷ややかな悟性主義を克服した」というヴィンデルバントの解釈に共感を示している。[4] こうした視点から氏は、『実用的見地における人間学』で論じられている「啓蒙の三つの格率（①自分で考える（＝みずから自由に考える、自分自身の理性を用いる）、②（人々と交わる際には—原文）他人の立場に立って考える、③いつもみずからと一体になる（みずからが一貫する）ように考える」をも道徳的視点から理解しようとする。これらの「格率」が重要なのは、「それら

が最終的には道徳的善悪をわきまえる智恵にいたる道だからであり、人間の道徳的啓蒙を可能にする道だからである」（Ⅱ　**カントにとって「啓蒙」とはなにか**—啓蒙に必要な三つの格率）。

このように氏は、カントにとって「啓蒙」がその思索全体を貫く基本概念であることを明らかにすることで、まさにカント哲学が一貫した「啓蒙の哲学」であることを論証するのである。

2）「人間理性の目的論」

氏のカント理解のもう一つの特徴は、カントの「目的論（Teleologie）」的視点の重視にある。「目的論」とはもちろん、すべてのものごとをある目的から一元的にとらえる思考法をいう。ふつうカントではこうした視点は、ア・プリオリな原理としての「合目的性」を柱とする『判断力批判』において展開されるとされている。前半は人間の美的（宇都宮氏はästhetischを「情感的」と訳される）判断を、後半はその目的論的判断を「合目的性」を原理として解明しようとしているからである。氏はここでも、人間の道徳性と「目的論」的性格を関連づける。カント道徳論の展開を、「人間の全規定（＝使命）つまり道徳」を究極目的とし、それ以外の人間理性の諸目的を究極目的に従属させる試みとし、それを実践的な「自由の目的論」とみなすからである。その際手引きとされるのは、もちろん「目的それ自体の定式」とも言われるカントの定言命法の「第二定式」である。

「汝の人格やほかのあらゆるひとの人格のうちにある人間性を、いつも同時に目的として扱い、けっしてたんに手段としてのみ扱わないように行為せよ」（『道徳の形而上学の基礎づけ』）

「目的」との関連で「第二定式」の意義が強調されるあまりか、いわゆる「汝の意志の格率が、いつも同じように普遍的立法の原理となるように行為せよ」という「第一定式」が、ほとんど出てこないのが気にかかる。

それはともかく氏はこうした「目的」解釈を前提に、「人間理性」を実践的・行為的能力つまり「純粋実践理性」と理解する。「人間理性の目的論」とは、「実践理性の目的論」を意味するのである。氏はさらに「人間はみずからの

理性によって……みずからを開化し、文明化し、道徳化するように規定されている」とし、それを人間の技術的・実用的・道徳的素質とも人類の「啓蒙」の進展とも結合することで、人類が全体として道徳化されたとき人類の啓蒙は完成するという結論を導き出すことになる（Ⅲ　**カントの啓蒙の哲学**――「人間理性の目的論」をめぐって）。

なお氏は、カントの「目的論的視点」を「神による創造の目的論」として信仰とも結びつける（Ⅵ　**人類の啓蒙に宗教は必要か**――カントの宗教理性批判）。これは、もちろん名著『カントと神―理性信仰・道徳・宗教』（1998）の基本テーマでもある。なお同書で氏は副題にある「理性信仰」を、「理性への信仰」と「理性による信仰」という2つの意味に解釈している。その際、ここでの「理性」も「純粋実践理性」であることが強調されている（2ページおよび52ページ）。こうした理解は、人間を実践的・道徳的視点からとらえる今回の両著でも一貫している。

3）「永遠平和」（Ⅶ　**歴史と文化**――永遠平和と啓蒙の完成）

本書の副題は、「人類の啓蒙と永遠平和にむけて」とされている。いきなり「永遠平和」が出てくることに、違和感をもたれる方もあることだろう。カントの「啓蒙」の目標は人類の道徳的完成ばかりでなく、そうすることでいかにして道徳的に完成した人類社会つまり「目的の国」を実現するかにある。そこでの人類の課題とされているのが、一つの「理念」としての「永遠平和」である。カントは「最高善」の地上での実現を熱望し、それを達成するためにも最高の政治的善としての「永遠平和」の地上での実現を強く求める（『カントと神』第8章）。では、「永遠平和」が一つの「理念」であるとはどういうことだろう。

①「理念」の三義

カントは、「理念」という用語を3つの意味で用いている。[5]

イ）理論認識を支える「ア・プリオリな原理」の一つである「推理形式」としての「理念」　カントは理論認識を可能にする能力を「感性・悟性・理性」とし、そのそれぞれに与えられた多様を統合する「ア・プリオリな形式」を

割り振っている。感性のそれが直観形式としての「空間・時間」であり、悟性のそれが概念形式としての「カテゴリー」、理性のそれが推理形式としての「理念」である。ここでは多様な概念を「総体性」へ導く「理念」は、内的な総体性へと導く「心」、外的なそれへと導く「世界」、両者の存在根拠としての「神」の3つとされている。

ロ）理論面・実践面での完成・完結の目標・条件・課題としての「理念」　カントでは人間は理論的認識のめざす「総体性」、つまり完全な認識には到達できない。認識の出発点となる感性の多様が、経験的にしかつまり不完全にしか与えられないからである。したがって人間は内的・外的・神的世界を「あたかもそれが認識できるかのように(als ob)」追い求めるしかない。このように理論面での推理形式としての「理念」は、同時に人間にとって達成されることのない完全な理論認識のたんなる目標・課題、つまり狭義の「物自体」とならざるをえない。

実践面でも同様で、人間は有限性つまり死という限界に付きまとわれている。そうした人間が道徳的完成という実践面の目標・課題を達成するための「条件」とされるのが実践的「理念」である。これも3つからなり、内的条件とされるのが「不死」であり、外的条件が何者にも拘束されないという「自由」であり、両者を可能にするものとしての「神」である。もちろんこれも個々の人間には達成できないもので、全体としての「人類」に託されることになる。以上を表にまとめると次のようになろう。

理論的	**心**（Seele）完全な内的世界	認識を完成に近づけるための目標、課題＝狭義の「物自体」
	世界（Welt）完全な外的世界	
	神（Gott）両者を可能にする存在	
実践的	**不死**（Unsterblichkeit）	理論的認識を完成させ、人間を道徳的に完成させるための条件＝個人としては達成不可能
	自由（Freiheit）	
	神（Gott）	

カントはこのほかにも、人間を道徳的完成へと導くいくつかの「ア・プリオリな原理」を「理念」としてあげている。もちろん「永遠平和」もその一つであり、「最高善」「普遍意志」などもその例である。

ハ）「歴史」などを貫く万物の支配原理としての「理念」　もちろんこうした「理念」を哲学の軸に据えたのはヘーゲルであるが、次に述べるように、カントも「世界市民的意図における普遍史の理念」や『第三批判』の後半「目的論的判断力」では、かなり接近しているように思える。

②「目的論的自然観」と歴史　「およそ被造物のすべての自然的素質は、いつかは合目的に展開するように規定されている」。[6] つまり「歴史」は、こうした自然的（生まれながらの、神から与えられた）素質が開花する場とされている。

こうした理解からカントは、「歴史」を動かすものとして「非社交的社交性」、つまり人間の「利己的傾向性」を強調する。しかしそれが蔓延したのでは、地上はまさに「万人の万人に対する戦い」の場となる。人間の開花した資質は、それぞれの国家内に「共和的体制」を生み出すとともに、国際間での平和機能としての「国際連合」を生み出す。それは「一つの世界共和国という積極的な理念の消極的な代替物」にすぎないにしても、「人類のあらゆる根源的な素質が展開する母胎としての普遍的な世界市民的状態」である。[7]

③「宗教」の役割　ここであらためて、「宗教」の役割が強調される。「目的の国」を、「道徳的理性宗教」に導かれた「倫理的共同体」と考えるからである。氏は、すべての宗教の統一をめざす「エキュメニズム（Ecumenicalism, Ecumenism＝1962年の第2バチカン会議「エキュメニズムに関する教令」「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」など）にも注目する。これは、レッシングが『人類の教育』などで伝えようとした「寛容の精神」にもつながるものだろう。

なお本書『カントの啓蒙精神』については、日本カント協会の機関誌『カント研究　8』（2007、213～216

ページ）で宮島光志氏が、「『宇都宮カント学』の最良の入門書」として的確な書評を寄せられている。

四　付記

最後にご本人に反論いただけないのが残念だが、個人的質問も受けたので、どうしても気にかかる点を二つだけあげておきたい。

1）「善意志」「目的自体としての人格」などの価値の超「批判」的「絶対視」への疑問

宇都宮氏は最終的には、カント哲学を徹底して道徳主義的に解釈することで一貫性を持たせようとする。いわば「実践理性の優位」を総合的に解釈するわけだが、今回のカントの「啓蒙」観の道徳的理解などでは大きな整合性と説得力を与えているように思う。とはいえカントの「批判哲学」の精神からすれば、すべてのものごとは「白紙から検討」されなければならず、根底からの「演繹（Deduktion）」つまり「権利付け」を必要とするのではなかろうか。その点では「善意志」や「目的自体としての人格」などの道徳にかかわる基本概念も例外ではないはずである。氏自身も「相互主体性とその世界」（１９７８）などではカントの論理の循環に疑問を呈しておられるが（『再生』１９５ページ）、『啓蒙精神』ではそれはなくなり、無前提なものとして「絶対視」されているように思われる。こうした特定の概念の絶対視は、実はカントの思考の欠陥あるいは不徹底な点であり、それを克服しようとする試みがいわゆるフィヒテ以降の「ドイツ観念論」を生み出すことなったのではなかろうか。もちろん氏も、前提のないところから学を見直すという「現象学」なり「現象学的還元」の基本姿勢を高く評価しているように見えるが、こうした「転回」をどう考えたらよいのだろう。

2）「道徳一元論」的カント理解への疑問

私はカントが生涯をかけてめざしたのは、『批判』をとおしての『自律』への『啓蒙』ではなかったかと考えている。[8]1に述べたとおり「批判」はすべてのものごとの白紙からの検討、つまりDeduktion（演繹・権利付け）の深化を意味する。カントは、一切の学的権威を拒否し否定するところから哲学の再生を図ろうとしたのである。その際つまずきの石とされたのが、人間の「自律性」をどう基礎付けるかだったのではなかろうか。宇都宮氏はもちろんより総合的で深い見地からではあるが、最終的に「啓蒙」を人間のめざすべき目標とされた。その点で一致できたのは嬉しいが、気にかかるのはその目標が「道徳的啓蒙」、つまり「道徳」への「啓蒙」である点である。

もちろん私もカントが「実践理性の優位」の立場に立ち、人間の究極目的を道徳的完成に求めたことは理解しているつもりである。けれど『三批判』を中心とする人間理性の検討は、やはりギリシャ以来の「哲学」の課題である「アルケー」の追求にあり、それを人間のもつ諸能力から解明することにあったのではなかろうか。

そうしたカントにとってもっとも重要な課題の一つは、人間の諸力をその「自律性」とどう結びつけるかにあった。ヒュームによって「独断のまどろみ」から目覚めさせられ、ルソーやスコットランド啓蒙によって「人間の尊厳」に気づかされたカントは、理論と実践を含む人間のあらゆる側面から人間の「自律性」の基礎付けと取り組む。

カントは経験的原理によっては、人間に普遍性も必然性も保証し得ないと考える。こうした視点から理論理性には「ア・プリオリな原理」として、直観形式としての「空間・時間」・概念形式としての「カテゴリー」・推理形式としての「理念」が与えられる。実践理性のそれは、いうまでもなく「道徳律」としての「定言命法」である。美的判断力と目的論的判断力に付与されるのは、「合目的性」というそれである。このように「ア・プリオリな原理」を真・善・美、さらにはそれらを統合する目的論的志向を導く内的原理とすることで、カントはわれわれ人間の「自律性」が保証されると考えたのである。

それと同時に人間は、その本性である「自律性」に向けて「啓蒙」されなければならない。カントが「理性批判」と並んで、『ベルリン月報』を主たる舞台に「時評論文」を書き連ね、ルソーに学んで「文化批判」と取り組んだのはそのためである。「ア・プリオリな原理」をもとにした「自律」の基礎付けが『三批判』はもちろん、『法論』や「平和論」までをも貫く支配原理となっていることを重視してみたい。カントにとって「道徳」という地平は、人間の基底をなす重要な分野ではあっても、あくまで人間の諸能力がかかわる一分野にすぎないのではなかろうか。「人間理性の目的論」は人間のかかわるすべての分野に及ぶものでなければならないし、人間の「啓蒙」も同じように考えられるべきだろう。「啓蒙」は「道徳」だけに限定されてはならず、真からも美からも成し遂げられなければならない。その点では「道徳一元論」的カント解釈・「啓蒙」解釈は、やや狭すぎるように思えるのだがいかがだろう。

（２００８、９）

（1）Max Weber *Gesamtausgabe Abteilung I : Schriften und Reden,* Bd.17, Wissenschaft als Beruf (1917 / 1919), Tübingen, S.87 und 109.

（2）*G.W.F. Hegel Werke 20, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie III,* Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1971, S.332f.

（3）拙著『十八世紀ドイツ思想と「秘儀結社」上』多賀出版、１９９４年、１３８～１５０ページ参照。

（4）W. Windelband, *Die Geschichte der neueren Philisophie II,* Leipzig 1880, S.3.

（5）拙著『ドイツ観念論における「自律思想」の展開』北海道大学図書刊行会、１９８９年、80～93ページ参照。

（6）*Kants Werke. VIII, Abhandlungen nach 1781,* Berlin, S.18.

（7）*Ebenda,* S.28.

（8）前掲の拙著『ドイツ観念論における「自律思想」の展開』をご覧頂きたい。